

渡邊稜也¹: 報告—第45回日本植生史学会談話会Takaya Watanabe¹: Report—The 45th forum of the Japanese Association of Historical Botany

第45回日本植生史学会談話会「琵琶湖と水月湖:埋没林・化石林と湖沼堆積物研究の最前線」が、2018年11月12日(月)に実施された。この巡検は、11月10日(土)に開催された日本植生史学会公開シンポジウム「時空を超えた埋没林・化石林研究の進展に向けて」(滋賀県立琵琶湖博物館)に対応する内容で、案内者は山川千代美(琵琶湖博物館)、小島秀彰(若狭三方縄文博物館)、北川淳子(福井県年縞博物館)の各先生で、世話人は林竜馬(琵琶湖博物館)、那須浩郎(岡山理科大学)の両先生であった。

当日は、8:00にJR草津駅西口を出発した。琵琶湖とそれを取り囲む山々について、地質や成因などの解説を受けながら、琵琶湖大橋を渡り、1時間半程で安曇川河床の化石林へ到着した。

安曇川周辺には古琵琶湖層群の堅田層相当層が分布し、河岸には直立した状態で樹幹が露出している(図1)。足



図1 安曇川の河岸部に露出した埋没木。



図2 植物遺体を探す参加者の方々。

元を掘り返せば、すぐにミツガシワの種子やクルミの堅果などが産出し、参加者は完形かつ大きいものを見つけようと、潮干狩りさながらの光景が広がった(図2)。筆者は大型植物遺体を探すのは初めてで、大変苦戦したが、先生方にご教授頂き発見することができた。露頭には礫を多く含む層が確認でき、洪水が起こる環境が推察された。そのような層には、上流からの運搬によって異地性の化石が含まれ、環境復原の際には注意する必要があることを学んだ。

若狭街道(鯖街道)を通り、次の目的地である福井県の三方五湖周辺へ向かった。鱒川とその支流域に広がる三方低地帯は、東西を山地に挟まれ、東側には逆断層である三方断層が走り、隆起を繰り返す。そのため、当低地帯は相対的な沈降域であり、排水不良が起きることで湿地性の環境となっている。このため、多くの遺跡や、スギを中心とする埋没林が地下に保存される地域である。

若狭三方縄文博物館では、展示エリアに入っただけで埋没スギが鎮座し、参加者の視線を集めた(図3)。このようなスギは堅く、この地域で多く産出することから、有用な木材資源でもあり、建築材やテーブルなどに加工される。展示は、鳥浜貝塚をはじめとする周辺の遺跡について学ぶことができる内容で、漆を用いた櫛など、日本植生史学会ではおなじみとなった出土品を実際に目にすることができた。参加者には当地域の遺跡に深く関わった方々も多く、発掘当時の思い出を聞くこともできた。この見学の後、昼食となった。

昼食後は、埋没林の包含地を巡った。三方五湖東隣の「かや田」地区は、三方断層の影響で窪地となっており、一段と排水の悪い場所であった。ハンノキ林が形成され、非常に湿潤であることが一目でわかる状況であった。地盤も軟



図3 若狭三方縄文博物館に鎮座する埋没スギ。



図4 黒田地区での集合写真 (撮影：箱崎真隆氏)。

弱で、スギなどは成長と共に自重で沈み、農作業などに用いる重機も例外ではないと説明を受けた。産出する埋没木には、伐採痕がみられる場合があるようで、旧来からの利用を示唆するものとして取り上げられた。

次に、上記の地区から南に5 kmほど移動し、鱒川流域の黒田地区を見学した。ここは圃場整備をはじめ、各種の建設に伴って多くの埋没木が産出した場所で、現在でも未発掘の埋没林が存在するとみられる。ここでも軟弱な地盤のために、道路が沈降し波打つ状態を目の当たりにし、驚嘆するばかりであった。このポイントにて、記念写真を撮影した(図4)。

本巡検の最後の目的地は、福井県年縞博物館であった。この博物館は、水月湖に堆積した年縞堆積物を展示・解説するもので、2018年9月に開館したばかりである。建物の外観など、随所に縞模様を意識したデザインが取り込ま



図5 福井県年縞博物館の「年縞ステンドグラス」。

れ、来館者の期待を高めていたように思う。7万年分の年縞堆積物が薄片に加工され、「年縞ステンドグラス」として展示されており、下層ほど縞が密になる様子や、狭在するテフラを自らの目で観察することができる(図5)。解説には、映像資料が多く使われ、一般の方々にも伝わりやすいものと感じた。特に参加者の注目を集めた展示は、水月湖周辺の植生景観の変遷を花粉分析から再現したVTRで、前日までの発表さながらの活発な議論が交わされた。

館内には、立命館大学古気候学研究センターのラボが併設され、花粉化石を用いた放射性炭素年代測定の試みについて解説を受けた。ガラス越しに室内を覗くと、セルソーターと呼ばれる大型の機材が特に目を引いた。これは、花粉化石のみを堆積物から分離するもので、抽出前後の写真を見比べ、その効果を検討することができた。年縞博物館を15:30に出発し、賤ヶ岳パーキングエリアを経て、16:45に米原駅着・解散となった。

今回の巡検は、植物化石はもちろんのこと、多くの先生方に解説を賜り、地形・地質や考古学など幅広い範囲の話題が提供された。筆者は地理学専攻に所属していたため、日頃の巡検対象は現在の地形や植生が主体であることがほとんどであった。そのため、学際的な日本植生史学会の談話会は、他分野の領域をも学ぶことができる非常に貴重なものと感じられる。また、最先端の研究を進める参加者の皆様との交流は刺激的で、興味の幅を大きく広げて頂いた。末筆ながら、本談話会を企画・運営頂いた世話人の皆様と、解説下さった先生方に深く感謝申し上げます。

(¹ 〒156-8550 東京都世田谷区桜上水3-25-40 日本大学大学院理工学研究科地理学専攻 現所属：〒563-0048 大阪府池田市呉服町10-14 明治コンサルタント株式会社大阪支店)